

編 集 後 記

本年8月終わりにインドのチェンナイで開催された第7回アジア肝胆膵外科学会に出席する機会を得た。チェンナイというよりかつてのマドラスと言ったほうが馴染みがあるかもしれない。アジア各国に加えアメリカ、ヨーロッパより肝胆膵外科を専門とする外科医が集結して熱心な議論が3日間にわたり交わされた。我が国の消化器外科は世界をリードする立場にあることは周知の認めるところであろう。私が専門としている肝胆膵外科も欧米に引けをとらないと確信している。実際、日本からの演題数は多く、その内容もすばらしいものであった。しかし、今回学会に参加してアジア各国の肝胆膵外科のレベルは急速に向上していることを実感させられた。以前より、香港、韓国の肝移植を代表とする肝臓外科のレベルの高さは際だっていたが、それ以外の分野でも確実なそして急速なレベルの向上がみられている。我々日本の外科医もうかうかしていられないぞと痛感させられ、帰国の途に着くことになった。

帰国して机につき、山積みされた査読すべき論文を前にして湧いてきたあらたな感慨を述べさせて頂くことにする。そもそも日本消化器外科学会雑誌は日本の消化器外科の中核をなす学会誌であり、その内容は日本のレベルを反映するものと言っても過言ではない。読者は基本的には学会員であり、また、日本語で書かれており、international magazine とは言えないが、その内容が日本の消化器外科に関わる者に与える影響は計り知れない。アジアさらに世界の消化器外科における日本の立場を維持・向上させるためにも学会誌の果たす役割は大きく、更なる充実が望まれるところである。

私は編集員に加えて頂き約2年論文査読に携わってきたが、少しでも学会誌のレベルの向上に貢献することができたか、いささか自信がない。上西委員長をはじめとする諸先生かたのご助力でここまでやってこれたというのが現状であろうか。しかし、今回は(今回も言うべきか)新たな緊張した気持ちで査読することができたと感じている。編集委員として何をすべきか、また、何を求められているのか、考える良い機会であったような気がする。たまには外国に出て刺激を受けることも大切だなとあらためて感じさせられた。

(窪田 敬一)